

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 6日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011年度

課題番号：20720167

研究課題名（和文）入明記の史料学的研究に基づく日明関係における大内氏の位置の解明

研究課題名（英文）Studies on Ouchis' Position and Rolls in the Japan-Ming intercourse  
Based on the Historiographical Analysis of the Japanese Travel Sketches (Nyumin-Ki)

研究代表者 須田 牧子 (SUDA MAKIKO)

東京大学・史料編纂所・助教

研究者番号：60431798

研究成果の概要（和文）：

第一に、現存最古の入明記である「笑雲瑞訥入明記」について、これを翻刻・研究し、その成果を『笑雲入明記—日本僧の見た明代中国』と題して刊行した。第二に、入明記研究のための根本史料である「策彦入明記録及送行書画類」の史料研究を行ない、史料性格についての検討を進めるとともに、本史料群も含めた関連史料のテキストデータ化を進め日明関係に関わった人間たちの属性や活動を見通しやすくした。第三に、以上を基礎に中世日明関係の特質について論じた。

研究成果の概要（英文）：

First, I investigated about "Shounzuikin Nyumin-ki" that is the oldest Japanese Travel Sketches (Nyumin-Ki). And I published it. The name of the book is "Shoun Nyumin-ki"

Next, I analyzed about "Sakugen Nyuminkiroku oyobi Soukou shogarui". It is the fundamental historical records about the diplomacy of Japan and China. I digitized it. As a result, we can understand well now about the human relations of the people concerned with the diplomacy of China and Japan.

The third, Based on the above result, I wrote the paper about the special feature of the diplomacy of medieval Japan and China.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：交流史・史料研究・中世史・日明関係史

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代から対外関係史は飛躍的に進展した。作業仮説として「環シナ海地域」が設定されたことにより、対外関係史は線としての

関係ではなく面としての関係の追究へ向かい、特に対馬を中心とする玄海灘地域の歴史像を豊かなものとした。一方で従来の研究においては対馬守護宗氏以外の守護勢力（大

内・少弐・島津など)の通交実態の追究が不十分であり、上述の研究成果は必ずしも当該期の政治・社会状況に位置づけられるものとはなっていない。中世対外関係の展開を守護レベルの通交主体の政治動向と連関させて追究することは、対外関係が当該期の社会にもたらした歴史的意義を追究することであり、中世後期の国家像について考える重要な素材である。それはまた対外関係史を孤立した分野の研究としないために必要な視点でもある。

以上の認識に立ち、研究代表者は、一貫して当該期の国家の権力の主要な構成要素である守護レベルの地域権力に注目し、その対外関係を、室町政権を中心とする政治動向のなかに位置づけるという研究を志してきた。その際の具体的な素材としては大内氏をとりあげ、大内氏の対外関係のなかでも特に対朝関係に注目し、中世後期の大内氏の対朝関係が、室町政権自身の対朝関係と密接に関わる日朝関係史上、極めて重要な意義を持つものであったことを明らかにした。この成果を踏まえて、次なる研究目標として、日明関係の展開と構造における大内氏の位置を解明することによって、中世後期国際関係の実態とそれが国内政治史に与えた影響を追究する必要があると考えた。大内氏は元来遣明船を最終的に掌握する勢力として著名であるが、日明関係の初期段階においては遣明船には参加していない。日明関係においては細川氏と異なり明らかな後発勢力であった大内氏は日朝関係における実績を誇示し日朝関係を遂行する上で培ったノウハウと人脈を総動員しながら日明関係への参入を果たしていったようである。その具体像の追究は大内氏という媒体を介して日明・日朝関係が東アジアという舞台の中で有機的な連関を持って営まれていたことを如実に示すであろう。

しかしながら、こうした視点を持って日明関係における大内氏の位置を論じようとしたとき、その前提となる日明関係史研究自身が意外なほどに手薄であり、まずは日明関係史自体、基礎的研究それも史料学的な研究が必要であることに気が付かされた。従来の研究段階では、日明関係の基礎史料たる入明記についてさえ史料学的研究は十分でなく、各遣明船の動向についても、基礎的な部分では戦前の小葉田淳氏の研究を超えていない。この状況が小葉田氏の研究の偉大さによるものであることは否定しないが、しかし小葉田氏の頃から格段に史料の公開状況が向上し、現地調査も容易となり、何よりも、隣接諸分野の研究の著しい進展がみられる今日において、いま一度、日明関係の基礎史料の史料学的検討を行ない、各遣明船の動向を仔細に追い、東アジアという広がりの中で日明関係

をとらえ位置づけていく作業は不可欠と考えた。以上の現状認識に基づき、まず若手研究スタートアップを申請して、日明関係史料のなかでも基礎的な文献である入明記の悉皆調査・撮影に着手した。本研究はこのスタートアップの研究の継続・発展として、開始した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日明関係に関わる史料の収集と分析を通じて日明関係史研究を深めていくこと、そしてそれを基礎に日明関係における大内氏の位置を明確にし、中世後期国際関係の実態とそれが国内政治史に与えた影響を解明していくことの二点である。具体的には、第一に、スタートアップ研究期間中に入手した各種入明記についての整理・翻刻・注釈の作成を行なうこと。この際、入明記の記主の文集をはじめとする関連史料の検索成果を活用し、入明記および関連史料相互の関連付けを行なって、遣明船の故実・先例がいかなる形で伝授されているかを明確にし、入明記が伝える各回の遣明船の実態を詳細に検討する。第二に、入明記の記主、特に最も多くの入明記を蓄積し自らも書き残した策彦周良の動向を大内氏との関係を軸に整理すること。この成果をもとに大内氏の外交を支えた人脈とシステムを復元し、第一の成果と併せて大内氏の対明外交への参入とその掌握が国内におけるいかなる政治的折衝の結果であったのか、とりわけ故実・先例がものをいう外交関係において大内氏はいかにしてそれを獲得したのかという点を明確にし、中世後期政治史に日明関係の展開を有機的に位置づけることをめざした。

なお、入明記とは、遣明船に乗り込んだ使節たちの日記・備忘録の総称である。現存する入明記には主として、遣明使節本人が書いたもの、遣明使節が出発の準備のために前任者のものを写したと考えうるもの、近世に写されたものなどが存在する。これら各入明記の流通状況の全体像は今まで明らかにされてこなかった。しかし、遣明使節たちがその行程の中で直接書き記した記録である入明記こそ、故実・先例の比重の高い外交関係である遣明船を営む上では、参照すべき基礎的な文献であったはずであり、その流通実態を確定することは、遣明船経営を行なおうとする各勢力の動向を窺う一つの方法となりうる。さらにその入明記の内容分析は、当該期の日明関係の実態を解明する上で極めて有益な作業である。従ってこの入明記の悉皆調査と撮影・翻刻及び内容分析は、日明関係史研究進展のための極めて重要かつ基礎的な作業なのである。

### 3. 研究の方法

(1) 現存最古の入明記である「笑雲瑞訥入明記」の校訂、書誌の検討、現地調査の成果を含めた注釈の作成、関連史料の検索と翻刻を行ない、その成果を刊行する。

(2) 二つの入明記を残した策彦周良関係史料「策彦入明記録及送行書画類」の撮影・整理・翻刻。写本の検索も併せて進め、史料性格も検討する。可能な限りテキストデータを作成し、全文検索を可能にすることで、登場する人物たちの比定を容易にし、日明関係を取り巻く人脈を見えやすくする。

(3) 入明記に限らない関連史料の検索を行ない、史料状況の向上を目指す。

(4) 大内氏自身の外交関係と京都との関係の持ち方について基礎的なデータを蓄積する。

### 4. 研究成果

(1) 「笑雲瑞訥入明記」及び関連史料の検討。

① 現存最古の入明記である「笑雲瑞訥入明記」について、これを翻刻・研究し、その成果を『笑雲入明記—日本僧の見た明代中国』と題して刊行した(村井章介氏と共編、後掲図書②)。「笑雲瑞訥入明記」は15世紀半ばの宝徳度遣明船の際の日記である。宝徳度船は大内氏が初めて参加した遣明船であり、日明関係の画期をなした遣明船でもある。全359頁、読み下し・注釈編170頁、諸本との対校成果を反映させた原文編64頁、参考資料編70頁に、須田による解題、村井氏による解説を付した。注釈編の注の数は734に及び、各種文献資料の調査結果はもちろん、現地踏査の成果をも織り込み、写真・図版も多く収録することができた。この種の本の常として完璧はありえず、訂正箇所もすでに多く見つかっているが、注釈本の刊行は、入明記としては初めてのことであり、今後の研究の叩き台となる、意義ある成果と自負している。

② 出版に先行して、『笑雲瑞訥入明記』の書誌学的な検討を中心としつつ入明記全般の性格について、中国で学会報告を行ない、その内容を論文発表した(後掲学会報告④、雑誌論文⑩)。

③ 「笑雲瑞訥入明記」と極めて関係が深い「善隣国宝記」についての検討を行ない、現存最古と予測されていたケンブリッジ大学所蔵の「善隣国宝記」の原本調査を行なった。「善隣国宝記」は室町幕府の外交顧問が作成した外交文書集で、「笑雲瑞訥入明記」はこの付録として伝来したものと考えられている。ただし結論から言えば、ケンブリッジ大学所蔵本は中世末期の形態はとどめているものの、写本としては近世を遡るものではなく、従来の認識と異なり現存最古とは言えないものであることが判明した。またこの調査により

現存の「善隣国宝記」には「笑雲瑞訥入明記」を伴うものは一つもないことが確定された。

(2) 「策彦入明記録及送行書画類」の撮影と史料研究。

入明記研究のための根本史料である「策彦入明記録及送行書画類」(45種の史料を含む。京都国立博物館寄託・妙智院所蔵)について、①ご所蔵者と関係諸機関のご理解ご協力のもとに写真撮影を行ない、「妙智院史料」と題して所属機関の図書室に入架し、入明記研究が広く行なわれるための基盤を整えた。この際、従来から所属機関に所蔵される謄写本・影写本・模写・写真等との関係が明確になるような形でデータを整理し、検索の便を図った(所属機関のデータベースで検索可能、または『東京大学史料編纂所紀要』44号、66-68頁参照)。

② この史料群の性格解明のために、翻刻・写本の検索・関連史料の収集を行ない、検討作業を進めた。従来翻刻されていた分についても、テキストデータ化を進め、適宜校訂を施した。本作業は関係史料が膨大であるため、完了していないが、不十分ながら全文検索できる史料が増えつつあることで、日明関係に関わった人間たちの属性や活動を見通すことが格段にしやすくなってきた。

(3) 遣明船関連史料の収集と検討。

(2)に並行して入明記以外の遣明船関係史料について、日本国王が派遣する遣明船という建前すら崩れてくる16世紀半ば、後期倭寇の時代も視野に収めつつ、収集・検討を進めた。

① 広橋綱光という15世紀半ばの貴族の日記に從來知られていなかった遣明船がらみの記述があるのを発見し、本日記の翻刻を進めた(後掲雑誌論文①⑧⑨)。

② 『倭寇図巻』・『蒋洲咨文』といった従来からよく知られている史料について再検討を行ない、新たな知見を報告した。とりわけ『倭寇図巻』については、これを後期倭寇と明軍との合戦を描いたものであることを確定することができ、反響を呼んだ(後掲雑誌論文②③⑥⑦、学会報告①②)。

(4) 大内氏研究。

大内氏研究の一環として、従来進めてきた研究に、本科研による成果を加え、

① 『中世日朝関係と大内氏』と題した単著を刊行した(後掲図書①)。これにより大内氏の日朝関係を整理・通観できるようになり、大内氏のもう一つの外交関係であり本科研の主題たる日明関係を見通していく基礎的な条件を整えることができた。

② 大内氏の基礎的な研究として、ほかに、大内氏の京都における活動基盤分析の一環として、奉公衆の大内氏について検討し、論文発表し(後掲雑誌論文⑭)、また15世紀半ばの大内氏の動向を対外情勢と絡めて検討し、

学会発表した（後掲学会発表③）。

（5）総合的なまとめの論文執筆。

以上（1）～（4）の基礎的研究を踏まえ、室町政権および大内氏の日明関係への関与の状況とその特質について、本研究で得られた知見を以下の論文にまとめた。A『蔭涼軒日録』一室町殿外交の舞台裏」（後掲雑誌論文⑤）、B「大内氏の外交と室町政権」（後掲雑誌論文④）、C「（邦題）遣明使節僧の中国体験」（2012年度東方学会より刊行予定、英文）。D「初渡集中・解題」（2012年度汲古書院より刊行予定）。Aでは室町殿の外交的特質を蔭涼軒に引き付けて論じ、Bでは大内氏の日明関係を室町政権との関係を重視しながら概観、Cは14-16世紀日明関係の概観をしたうえで、入明記を中心とした史料群の紹介とそこから読み取れる記主たちの異文化体験の特質を論じたもので、英語圏へ当該分野の紹介をも兼ねている。Dは策彦周良の入明記のうち、初度の渡航の日記である「初渡集」を中心に、「策彦入明記録及送行書画類」の史料的性格について簡単にまとめたものである。いずれも本研究でめざし、得られた成果をまとめたものである。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計14件）

- ①「史料紹介：綱光公記一寛正三年暦記（一）」、遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎、『東京大学史料編纂所研究紀要』22号、査読無、161頁／176頁、2012年3月。
- ②『「倭寇図巻」再考』、須田牧子、『東京大学史料編纂所紀要』22号、査読無、191/199頁、2012年3月。
- ③「『蔣洲咨文』浅探」、須田牧子、中国国家博物館『中国国家博物館館刊』2012年第1期、査読無、31/38頁、2012年1月。
- ④「大内氏の外交と室町政権」、須田牧子、川岡勉・古賀信幸編『日本中世の西国社会3西国の文化と外交』清文堂出版、査読無、43/85頁、2011年11月。
- ⑤『蔭涼軒日録』（蔭涼軒歴代）一室町殿外交の舞台裏」、須田牧子、松藺齊・元木泰雄編『日記で読む日本中世史』ミネルヴァ書房、査読無、180/198頁、2011年11月。
- ⑥「史料・文献紹介『倭寇図巻』」、須田牧子、山川出版社『日本史の研究』234号、査読無、28/35頁、2011年9月。
- ⑦「『倭寇図巻』再考」、須田牧子、中国国家博物館『中国国家博物館館刊』2011年第2期、査読無、34/46頁、2011年2月。
- ⑧「史料紹介：綱光公記一享徳三年暦記」、遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎、『東京大学史料編纂所研究紀要』21号、査読

無、88頁／101頁、2011年3月。

- ⑨「朝鮮使節・漂流民の日本・琉球観察」、須田牧子、荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係』第四巻、吉川弘文館、査読無、215/231頁、2010年7月。
- ⑩『「笑雲瑞訢入明記」書誌的研究』、須田牧子、王勇編『人物往来与東亜交流』光明日報出版社（中華人民共和国）、査読無、297頁/307頁、2010年5月。
- ⑫「史料紹介：綱光公記一文安三年・四年暦記」、遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎、『東京大学史料編纂所研究紀要』20号、査読無、99頁／111頁、2010年3月。
- ⑬『「韓国文集叢刊」に見る日本関係記事』、須田牧子、北島万次・孫承喆・橋本雄・村井章介編『日朝交流と相克の歴史』校倉書房、査読無、106頁/119頁、2009年11月。
- ⑭「加賀の大内氏について」、須田牧子、山口県地方史研究会『山口県地方史研究』99号、査読有、1頁/18頁、2008年6月。

〔学会発表〕（計4件）

- ①「蔣洲咨文について」、共同利用共同研究拠点研究「日本史史料の研究資源化」特定共同研究（海外）「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」、個別報告、於東京大学、2011年10月18日
- ②「倭寇図巻再考」、東京大学史料編纂所・同附属画像史料解析センター共催国際研究集会「比較研究：「抗倭図巻」と「倭寇図巻」」、個別報告、於東京大学、2010年11月
- ③「大内教幸考」、史学会大会日本史部会、個別報告、於東京大学、2009年11月。
- ④『「笑雲瑞訢入明記」の書誌的検討』、浙江工商大学日本文化研究所主催国際シンポジウム「東アジア文化交流—人物往来」、個別報告、於中華人民共和国杭州市、2008年7月。

〔図書〕（計2件）

- ①須田牧子『中世日朝関係と大内氏』、東京大学出版会、2011年、全304頁。
- ②笑雲瑞訢著、村井章介・須田牧子編『笑雲入明記—日本僧の見た明代中国』、平凡社東洋文庫、2010年、全359頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

須田 牧子 (SUDA MAKIKO)  
東京大学・史料編纂所・助教  
研究者番号：60431798

### (2) 研究分担者

なし。

### (3) 連携研究者

なし。